

政治の季節の移ろい

- 唐牛健太郎をフィーチャーしたダーク・ツーリズム -

Changing Tides of Political Seasons: Dark Tourism Featuring Kentaro Karouji

伊藤 寛幸*

ITO, Hiroyuki

*北海商科大学

本研究では、映像コンテンツによって伝えられている「安保闘争」にかかわる当時の情報を観光資源としてとらえる。そのうえで、放送された歴史的記録を辿り、ダーク・ツーリズムへと展開させるため当時の舞台を巡った踏査の紹介を目的とする。具体的には、NHK『映像の世紀 バタフライエフェクト 安保闘争 燃え盛った政治の季節』の番組内で映し出された、若きカリスマ北海道大学教養学部2年唐牛健太郎率いる全学連を中心に展開された安保闘争の歴史的舞台を巡りながら、現場を辿ることで過去と現在を繋ぎ、その象徴的な舞台となった現場に対して新たに観光的視点からの文脈付けを試みる。

キーワード：安保闘争、唐牛健太郎、ダーク・ツーリズム

1. 序論

1.1. 研究の背景と動機

戦後日本の政治運動を象徴する「安保闘争」は、当時のみならず現在に至るまで多大な影響がおよぼ歴史的な事件である。しかし、その記憶は時と共に風化しつつある。本研究では、NHK『映像の世紀 バタフライエフェクト 安保闘争 燃え盛った政治の季節』に記録されている当時の情報に着目し、若きカリスマ北海道大学教養学部2年唐牛健太郎率いる全学連を中心に展開された安保闘争の歴史的舞台を巡ることで過去と現在を繋ぎ、戦後日本における政治的運動の再考を通じて、その象徴的な舞台となった現場に対して新たに観光的視点からの文脈付けを試みる。

1.2. 研究の意義

本研究は、映像を通じて歴史的記憶を再確認し、ダーク・ツーリズムによって新たな視点を提示する。従来の観光資源では取り上げられにくい政治の歴史的現場を観光対象とすることで、訪問者に深い社会的・歴史的洞察のための情報を提供できる。また、安保闘争の舞台を巡ることで、時代の移ろいを肌で感じる機会が創出され、歴史と観光の新たな接点の創成を図ることが可能となる。この点において本研究をすすめる意義がある。

1.3. 関連研究の整理

ダーク・ツーリズムは「戦争や災害の跡といった悲劇の場を訪れる現象」と定義される（井出（2015））。その研究対象は「負の遺産」としての「観光資源」である。ダーク・ツーリズム研究の主要な訪問地と研究成果には、戦跡や災害被災地などにまつわる場所の訪問を観光の視点で取り上げた佐々木ほか（2018）、舩谷（2023）などがある。

一方、日本の近現代史における政治運動、特に「安保闘争」は、日本の戦後史において重要な

政治的・社会的転換点であったにもかかわらず、その舞台となった場所や人物に焦点を当て観光資源化を試みた学術研究を発見することはできなかった。特に、映像コンテンツを手がかりに当時の情報を観光的文脈で再構築するアプローチも未開拓の領域である。それは、「闘争」と「観光」が極めて結びにくい概念であるからと容易に推察できる。すなわち、NHK『映像の世紀 バタフライエフェクト 安保闘争 燃え盛った政治の季節』の番組内で取り上げられた若きカリスマ北海道大学教養学部2年唐牛健太郎率いる全学連により展開された闘争の歴史的舞台を巡り、現場をダーク・ツーリズムの観光資源として位置付ける研究は皆無である。

1.4.研究の目的

本研究では、映像コンテンツによって伝えられている「安保闘争」にかかわる当時の情報を観光資源としてとらえる。そのうえで、放送された歴史的記録を辿り、ダーク・ツーリズムへと展開させるため当時の舞台を巡った踏査の紹介を目的とする。具体的には、NHK『映像の世紀 バタフライエフェクト 安保闘争 燃え盛った政治の季節』の番組内で映し出された、若きカリスマ北海道大学教養学部2年唐牛健太郎率いる全学連を中心に展開された安保闘争の歴史的舞台を巡りながら、現場を辿ることで過去と現在を繋ぎ、その象徴的な舞台となった現場に対して新たに観光的視点からの文脈付けを試みたい。

なお、「安保闘争」を語るには、『60年安保』という“祭”もしくは“宴”の後の余波の影響を、全学連委員長を務めた唐牛健太郎とともに追うことが学術的価値を持つとの見方もある。しかし、本研究では主要なデータの出所をあえて限定された映像コンテンツにもとめる。それは、映像メディアが持つ叙述的・感覚的特性が、単なる文字資料では捉えきれない歴史的瞬間の空気感や人々の感情の動態を視覚的・聴覚的に再現しうるからである。特にNHK『映像の世紀 バタフライエフェクト 安保闘争 燃え盛った政治の季節』は、当時の記録映像や証言を交え、唐牛健太郎という人物を通じて社会運動の熱狂と葛藤を立体的に描き出しているからである。この映像コンテンツを分析対象とすることで、観光学の視点から「ダーク・ツーリズム」の観光資源化の可能性を探るとともに、視聴体験を通じて再構成された歴史の物語化の過程を検証することが可能となる。本研究によって、映像メディアが歴史的出来事をどのように再解釈し、観光資源としての価値を付与するかを考察することも可能となる。

2.データと方法

本研究で取り上げる映像コンテンツは、NHK『映像の世紀 バタフライエフェクト 安保闘争 燃え盛った政治の季節』である。番組概要はNHK（2024）によって以下ととらえることができる。

番組は2度にわたり繰り広げられた安保闘争・激動の記録である。いわゆる「60年安保闘争」は、戦争の記憶が色濃く残る時代に多くの国民を巻き込み国会を取り囲む国民運動となった。映像では、闘争を牽引する若きカリスマ、現代の英雄、全学連委員長、北海道大学教養学部2年唐牛健太郎が写し出されている。その後、いわゆる「70年安保闘争」では、戦後生まれの学生がゲバ棒と火炎ビンで武装し大学に立てこもるに至る。以後、凄惨な事件を引き起こし国民の支持を失っていった闘争は1970年代中盤で終焉を迎える。そして番組の最後に、度重なる逮捕の末に北海道大学を除籍になった、かつての60年安保闘争のリーダー＝全学連委員長・唐牛健太郎の姿が北海道オホーツクの海にあった。

番組は、日本の敗戦後の「サンフランシスコ講和会議（1951年9月）」にはじまり、「60年安保

闘争」を軸に、「70 年安保闘争」、「東大安田講堂事件（1969 年 1 月）」を経て「あさま山荘事件（1972 年 2 月）」に至るまでの概ね 20 余年の記録である。

本研究では、番組内容を参考に、以下の期間および現場を対象にフォーカスする。

期間については、唐牛健太郎が全学連委員長に就任した 1959 年 6 月から全学連委員長を辞任する 1961 年 7 月までの 2 か年（佐野（2016））とする。

現場については、番組（NHK『映像の世紀 バタフライエフェクト 安保闘争 燃え盛った政治の季節』）内で取り上げられていた「岸首相ら改定安保条約調印全権団の渡米を阻止しようと学生約 700 人が羽田空港ロビーを占拠した事件（1960 年 1 月 16 日）」（警察庁（1988））の事件現場としての「羽田空港」および「国会請願デモ（国会乱入未遂）事件（1960 年 4 月 26 日）」（注 1）（警察庁（1988））の事件現場としての「国会」（注 2）とする。

歴史的場景を体感する 2025 年 3 月現在の現場の諸元（パラメータ）は以下である。

表1 現場の諸元（パラメータ）

羽田空港		国会
1. 基本情報		
名称	東京国際空港	国会議事堂
所在地	第1ターミナル：東京都大田区羽田空港3-3-2 第2ターミナル：東京都大田区羽田空港3-4-2 第3ターミナル：東京都大田区羽田空港2-6-5	東京都千代田区永田町一丁目7番1号
構造	滑走路4本 旅客ターミナル3箇所	鉄骨鉄筋コンクリート造 地上3階地下1階建（一部4階、塔屋付）
アクセス 最寄り駅	公共交通機関として、電車・モノレール（京急、東京モノレール）のほか高速バス・路線バス・水上タクシーなど	東京メトロ 国会議事堂前駅（丸ノ内線、千代田線）永田町駅（有楽町線、半蔵門線、南北線）
歴史	1931年（昭和6年）「東京飛行場」として開港 1955年（昭和30年）5月 羽田空港ターミナル開館、供用開始	1920年（大正9年）着工 1936年（昭和11年）11月7日竣工
2. 特性		
国際的地位 政治的価値 歴史的価値	東京都心から約15kmと近接しており交通インフラが充実していることから世界屈指の利便性を誇る。2010年10月のD滑走路供用開始により国際線定期便の就航が再開され、日本と世界をつなぐ重要なハブ空港としての役割を果たしている。	法律の制定や予算の議決、内閣総理大臣の指名など、国権の最高機関、国の唯一の立法機関である。御影石でつくられた重厚な建物は白亜の殿堂と呼ばれ、大理石などが使われた建物内も意匠が凝らされた造りである。
見学・参観	開館時間内の一般エリアは自由に見学が可能である。ゲート内エリアの見学や職員による説明・案内などは原則実施していない。	両院ともに、申し込み手続き者を対象に、参観順路に従い監視等の案内による参観が可能である。参観の所要時間はおおむね60分である。
年間利用者数 参観者数	旅客ターミナル利用実績（2023年度） 国内線旅客数 61,841,189人 国際線旅客数 20,041,057人	衆議院参観者数 令和5年 407,674 人 参議院参観者数 令和5年 227,541 人

出展）「羽田空港」については、大田区（2022）、国土交通省（2024）、国土交通省（n.d.）、東洋経済新報社（2015）、日本空港ビルデング・東京国際空港ターミナル（n.d.）、「国会」については、衆議院（n.d.）、参議院（n.d.）を参考に作成。

3.結果および考察

3.1.羽田空港における現地踏査（注3）

2025年8月28日、現地踏査を実施した。

羽田空港は、1931年にわが国初の国営民間航空専用飛行場として誕生した。1945年の日本の敗戦後は、アメリカ軍が「ハネダ・エアベース」として利用した。1952年に施設の大部分が日本に返還され名称も「東京国際空港」と改称された。1958年の全面返還を経て1959年には、2本の滑走路とターミナルビルを持つ国際空港へと生まれ変わり、その後は、航空機のジェット化や大型化などの時代の要請に応じてきた。しかし、1978年の新東京国際空港（成田空港）の開港によって、国際線の多くが成田空港へ移転したことで、羽田空港は国内航空輸送の拠点空港として再出発することになる。その後2010年、新国際線旅客ターミナルの開業、4本目の新滑走路の供用が開始され、国際線は成田、国内線は羽田という「内際分離」の原則が転換された。さらに、アクセス性の高さや利便性を背景に、羽田空港の国際線利用者は年々増加し、空港の役割は首都圏の国内外交通のハブとして再定義されることとなった。この変化は、観光立国を目指す日本の諸政策においても重要な転換点となり、羽田・成田の「首都圏空港の役割分担」は柔軟かつ実用的な形へと進化し続けている（注4）。

踏査対象は第3ターミナルとした。羽田空港は、1931年の開港以来、幾度も拡張・改築を繰り返しており、空港機能の中核が遷移してきた経緯がある。1960年当時のターミナルビルは、現在の第3ターミナル付近にあった。第3ターミナルは、（国際線ロビーがあった）旧ターミナルの物理的遺構ではないが、象徴性、機能性、社会的空間としての継承性を帯びているといえよう。したがって、過去の出来事を現代的文脈で再構成する意味を持つ第3ターミナルは、歴史的記憶と現在をつなぐ象徴的な空間として本研究の媒介点となる。

第3ターミナル（Terminal 3）（写真1、写真2、写真3、写真4）：国際線を取り扱うターミナルである。2010年10月、東京国際空港国際線旅客ターミナルとして供用が開始され、2020年3月、「第3ターミナル」へ名称変更している。フロア構成は、エントランスプラザ（1階）、到着ロビー（2階）、出発ロビー（3階）、レストラン・ショップ（4・5階）である。

なお、羽田空港は、第3ターミナル（Terminal 3）のほか、第1ターミナル（Terminal 1）（注5）および第2ターミナル（Terminal 2）（注6）を有する。

3.1.1.空間の変容

現在、羽田空港は、国際競争力の強化に向けて大規模な再開発が進められている。事件当時に存在した構造物はすべて撤去・再整備され、物理的には一切現存していない。そのため、当時の空港施設と現在の空港施設との間に地理的・構造的な連続性は見られなかった。また、当該事件に関連する遺構や痕跡も、現地踏査において確認することはできなかった。

すなわち、当時の「事件現場」は物理的には消滅しており、過去を可視化するためには、映像資料や文献、証言といった補助的資料に依存せざるをえない状況にあることがあらためて判明した。

ただし一方で、この「空間の静謐さ」が、事件の記憶を想起させるダーク・ツーリズム的装置として機能する可能性もある。すなわち、事件の「不在」そのものが逆説的に、観光者に想像力を促し、歴史への内省を促す契機となりうる。

3.1.2. ツーリズムへの応用可能性

他方において、羽田空港におけるAR（拡張現実）技術を用いた歴史再現コンテンツの開発などが将来的には期待される。観光客がスマートフォンを通じて当時の映像や証言にアクセスできる仕組みが導入されれば、現在の空港空間が「見えない記憶の層」を持つ多層的な観光資源として再定義される可能性がある。

3.2. 国会議事堂周辺における現地踏査（注7）

2025年8月28日、現地踏査を実施した。

現在の国会議事堂は、1920年1月に着工し17年の歳月をかけて1936年11月に完成した。地上3階（中央部4階、中央塔9階）、地下1階、長さ206.36m、奥行き88.63m、中央塔の高さ65.45mの構造である。建築当時、御影石で装われ「白亜の殿堂」と賞賛された。1936年12月24日に召集された第70回帝国議会から使用されている。正面に向かって左側が衆議院、右側が参議院である。踏査対象は、国会議事堂および当時大規模な抗議行動が繰り広げられた国会議事堂周辺エリアとした。

国会議事堂（写真5、写真6）：日本国の唯一の立法機関として、法律の制定や予算の議決、内閣総理大臣の指名など国会の議事を行う殿堂である。ガイドの職員と一緒に巡る見学ツアーを利用し国会議事堂を参観した（注8）。参観では本会議場や中央広間などの主要な施設を観覧することができた。国会の歴史や役割について学ぶ貴重な機会となった。

国会前（交叉点）（写真7）：最寄り駅は、東京メトロ有楽町線「桜田門駅」。最寄り駅（桜田門駅）からは約192m、徒歩約3分の距離にある。

国会正門前（交叉点）（写真8）：最寄り駅は、東京メトロ丸ノ内線および東京メトロ千代田線「国会議事堂前駅」。最寄り駅（国会議事堂前駅）からは約353m、徒歩約6分の距離にある。国会正門が開くのは、以下の「特別な日」に限られる。①開会式に天皇陛下をお迎えする際、②衆参両院の選挙後に開かれる国会の召集時、③国賓もしくはそれに準じる外国の要人を迎える際。

国会前庭：入園は無料。開園時間は午前9時から午後5時30分まで。閉園日は12月29日から翌年1月3日まで。国会議事堂前に広がる庭園で、国会議事堂を背に左手に洋風庭園の北庭、通りを挟んで右手に和風庭園の南庭に分かれている。北庭は、三権分立を象徴する三面の時計塔（写真9）がある洋式庭園である。南庭は、小川や滝（写真10）が配される日本庭園である。

そのほか、建物正面には約300メートルにわたる「黄金ロード」の名でも親しまれている銀杏並木（写真11）が続き、都内有数の紅葉スポットとしても知られている。11月中旬ごろになると秋の深まりとともに、街を黄色く染め上げ地域の賑わいを支える重要な観光資源として訪れる人を魅了している。

3.2.1. 空間の歴史性

現地および現地周辺には、観光施設（注9）（写真12）の案内板（写真13）や歴史的遺構（注10）（写真14）の解説パネル（写真15）や銘板（写真16）が設置されているが、安保闘争に特化した情報は見受けられなかった。

周辺の道路は1964年の東京五輪に合わせた整備にともないほぼ現在の姿に改修された。すなわち、1960年の安保闘争で、反体制の象徴的な場面として国民の記憶に深く刻まれた学生らによりデモで埋め尽くされた当時の道路形状区画はすでに残っていない。ただし、国会議事堂は当時のまま現存している。国会議事堂の存在の「不変性」は、時代の移り変わりや都市構造の変化のな

かにあっても、国政の中枢としての象徴的存在が揺らいでいないことを意味する。変化する都市風景のなかで、国会議事堂のみが歴史的記憶を繋ぐ「変わらぬ象徴」として機能しているといえよう。すなわち、映像資料と物理的空間との対応関係を視覚的に実感することが可能であった。この点は、「映像の記憶」と「空間の記憶」とが接合する貴重な例であり、ツーリズムの資源としての潜在力が高いものと評価できる。さらに、多様な意味において象徴的建築物である国会議事堂の観察、認知という観光行動が、政治的権威や国家理念への認識を深化させる行為となろう。

3.2.2. 記憶の継承と政治的空間の再解釈

国会議事堂周辺は依然として「現役の政治空間」であり、最近年においてもデモ活動（注 11）がみられる。したがって、ここは「生きた歴史の舞台」であり、過去の記憶と現在の実践が交錯する空間でもある。このような特徴は、ダーク・ツーリズムの理論的枠組みでいう「コンフリクトヘリテージ（対立の遺産）」に該当しうる。特に若年層の政治的無関心が指摘される昨今ではあるが、歴史的デモの現場を歩くことが、政治参加や歴史認識の契機となる可能性は高い。今後は、教育旅行や市民講座といった形式で、当時の映像を見た後に現地を訪れる「学びのツアー」が企画されるならば、ツーリズムとしての社会的意義も高まり、また地域経済への波及効果も期待できるよう。

3.3. 映像資料との対話と空間経験の重層化

NHK『映像の世紀 バタフライエフェクト 安保闘争 燃え盛った政治の季節』で映し出されている唐牛健太郎らによる学生運動の姿は、単なる歴史的記録を超え、「時代の息吹」を現代に伝える媒体である。この映像作品と、現地空間との接触によって、観光する者の経験は単なる視覚情報の受容にとどまらず、「記憶の再構成」へと進化するであろう。

3.4. 総括的考察

羽田空港と国会議事堂は、まったく異なる性格をもつ空間である。しかし、ともに安保闘争という歴史的イベントの舞台であったことは、ダーク・ツーリズムにおける「空間の多義性」を示している。これらの場所に物理的な痕跡が少ないことは一見マイナス要因であるように思えるが、逆説的にいえば、映像や物語と結びつけることで「語られなかった歴史」を顕在化させる可能性はあろう。

本研究による踏査は、歴史的映像コンテンツを媒介とした観光資源化の可能性を提示するとともに、「忘却されゆく歴史」に対して、観光という行為を通じて新たな価値を与える実践の重要性を示唆するものである。

4. 結論

本研究では、映像コンテンツによって伝えられている「安保闘争」にかかわる当時の情報を観光資源としてとらえた。そのうえで、放送された歴史的記録を辿り、ダーク・ツーリズムへと展開させるため当時の舞台を巡った踏査の紹介を目的とした。具体的には、NHK『映像の世紀 バタフライエフェクト 安保闘争 燃え盛った政治の季節』の番組内で映し出された、若きカリスマ北海道大学教養学部2年唐牛健太郎率いる全学連を中心に展開された安保闘争の歴史的舞台を巡りながら、現場を辿ることで過去と現在を繋ぎ、その象徴的な舞台となった現場に対して新たに観光的視点からの文脈付けを試みた。本研究によって、安保闘争をテーマとした映像コンテンツが、ダーク・ツーリズムの観点から観光資源となりえる可能性を示すことができた。しかし、今回の

踏査結果のみでは、歴史的記憶の継承による政治の変遷を体感できる観光資源の情報提供には十分ではなかった。今後も継続して、唐牛健太郎縁の地に赴き、闘争のさらなる実相に迫り学術的空白を埋めたい。

注

注1) 1960年5月20日の衆議院での強行採決をきっかけに、岸内閣による安保条約改定強行採決に対する時の政府への怒りは、学生運動を中心とした大規模なデモへと発展した。とりわけ、多くのデモ隊が国会を取り囲む事態となった。全学連は国会への突入を諮り警官隊と激しく衝突した6月15日を「安保決戦の日」と位置づけた(警察庁(1988)、ダイヤモンド社(2025))。しかしこのとき、唐牛健太郎の姿はそこにはなかった。唐牛は拘留中であり6月15日のデモには直接関与していなかった(佐野(2016))。したがって、本研究では、6月15日のデモではなく唐牛が直接関わった1960年4月26日の「国会請願デモ(国会乱入未遂)事件」にあえて着目する。なお、新安保条約は、その後(1960年6月19日)国会で強行採決され自然承認される。

注2) 国政に携わる議論において機関としての立法府を指す場合は「国会」、一方、議会が開催される空間的地理的位置を指す場合は「国会議事堂」となる。本研究では、当時デモ隊が安保改定阻止を目的に突入を試み突入に至った在処としての「国会議事堂」を「国会」と表記するほか、適宜「国会議事堂」および「国会」を使い分ける。

注3) 本節は、日本空港ビルデング・東京国際空港ターミナル(n.d.)、日本土木工業会海洋開発委員会空港技術専門委員会(2010)、東洋経済新報社(2009)、日本経済新聞社(2019)からの引用による記述である。

注4) ターミナルの主な沿革は以下である。1955年5月：ターミナルが開館、供用開始。1964年9月：国内線到着専用ターミナルが供用開始。1970年6月：新国際線到着ターミナルが供用開始。1993年9月：第1旅客ターミナル供用開始。2004年12月：第2旅客ターミナル供用開始。2010年10月：新国際線旅客ターミナル供用開始。

注5) 第1ターミナル(Terminal 1)：日本航空(JAL)をはじめ、日本トランスオーシャン航空、スターフライヤーが使用するターミナルである。フロア構成は、京急線/東京モノレール改札口(地下1階)、到着ロビー(1階)、出発ロビー(2階)、レストラン&ショップ(3・4階)、貸会議室/レストラン(5階)、コンベンションホール/展望デッキ(6階)、展望デッキ(屋上階)である。

注6) 第2ターミナル(Terminal 2)：全日本空輸(ANA)、エアドゥ、ソラシドエアが使用するターミナルである。また一部国際線も発着している。フロア構成は、京急線/東京モノレール改札口(地下1階)、国内線到着ロビー(1階)、国内線出発ロビー/国際線到着ロビー(2階)、レストラン&ショップ/国際線出発ロビー(3階)、レストラン&ショップ(4階)、レストラン/展望デッキ(5階)である。

注7) 本節は、山形新聞(2015)、千代田区観光協会(2019)、日本産業廃棄物処理振興センター(2020)、国立国会図書館国際子ども図書館(2024)、NAVITIME(2025 a)、NAVITIME(2025 b)、NAVITIME(2025 c)、衆議院(n.d.)、参議院(n.d.)からの引用による記述である。

注8) 個人での参観のほか、国会を参観するコースが組み込まれている観光バスツアーの利用に

よって見学が可能である。国会議事堂を巡るバスツアーには、「靖國神社と国会議事堂」「国会議事堂と迎賓館赤坂離宮本館内部見学」、「テレビで話題♪「豊洲千客万来」の海鮮バイキングと国会議事堂」、「東京の新名所「豊洲千客万来」と国立競技場スタジアムツアー」などがある（はとバス（n.d.））。

注9) 憲法制定や議会関連の資料が展示され、日本の議会政治や憲政史を学べる展示施設として、憲政記念館がある。憲政記念館は、新たな国立公文書館および憲政記念館建設工事にともない代替施設移転のため休館していたが、2022年6月に、現在（踏査時点）の代替施設が開館している。なお、新たな国立公文書館および憲政記念館は、2029年11月開館の予定である。

注10) 歴史的遺構のひとつに日本水準原点および日本水準原点標庫がある。日本水準原点標庫は、ドーリス式ローマ神殿形式の古典的建築で、日本人建築家により設計された明治期の数少ない貴重な近代洋風建築である。土木遺産の顕彰を通じて歴史的土木構造物の保存に資することを目的に、2019年公益社団法人土木学会より選奨土木遺産の認定を受けた（土木学会（n.d.））。

注11) 戦争法制阻止を掲げた国会包囲10万人デモ（自由法曹団・改憲阻止対策本部（2015））、安倍前首相の国葬反対デモ（東京新聞（2022））、金権腐敗の自民党政治糾弾デモ（朝日新聞（2024））など。

【引用文献】

佐野真一（2016）『唐牛伝 敗者の戦後漂流』小学館。

【引用サイト・データ】

NAVITIME（2025 a）「国会前（交差点）」（<https://www.navitime.co.jp/poi?spot=intersection-52119>）[2025年8月24日参照]。

NAVITIME（2025 b）「国会正門前（交差点）」（<https://www.navitime.co.jp/poi?spot=intersection-52162>）[2025年8月24日参照]。

NAVITIME（2025 c）「国会前庭」（<https://www.navitime.co.jp/poi?spot=02301-t548>）[2025年8月24日参照]。

NHK（2024）『映像の世紀 バタフライエフェクト 安保闘争 燃え盛った政治の季節』、NHK 総合、2024年6月3日放送、（視聴日：2024年6月3日）。

朝日新聞（2024）「国会前でデモ「裏金議員やめさせたい」「選んだのは私たち」」（<https://www.asahi.com/articles/ASS1M6TX9S1MUTIL03L.html>）[2025年8月24日参照]。

井出明（2015）「ダークツーリズムの真価と復興過程“復興”のさらに先にあるもの」『復興』13、p.49-56.（<https://f-gakkai.net/wp-content/uploads/2020/09/13-1-7IDE-1.pdf>）[2025年8月24日参照]。

大田区（2022）「羽田空港の歩み」（https://www.city.ota.tokyo.jp/seikatsu/sumaimachinami/haneda_airport/rekishi/hanedakuko_ayumi.html）[2025年8月24日参照]。

警察庁（1988）「第1節 極左暴力集団等の変遷」『昭和63年警察白書』（<https://www.npa.go.jp/hakusyo/s63/s630101.html>）[2025年8月24日参照]。

国土交通省（2024）「東京国際空港供用規程」（<https://www.cab.mlit.go.jp/tcab/pdf/hanedakitei20240401.pdf>）[2025年8月24日参照]。

- 国土交通省 (n.d.) 「羽田空港について」 (<https://www.mlit.go.jp/koku/haneda/about/>) [2025年8月24日参照].
- 国立国会図書館国際子ども図書館 (2024) 「国会議事堂周辺」 (https://www.kodomo.go.jp/guide/ya/tokyo/nagatacho/spots_diet.html) [2025年8月24日参照].
- 佐々木薫子・山本清龍・山本信次 (2018) 「東日本大震災後の石巻市の来訪者意識にみるダーク・ツーリズムの課題と可能性」『環境情報科学論文集』32、pp.161-166 (https://www.jstage.jst.go.jp/article/ceispapers/ceis32/0/ceis32_161/_pdf/-char/ja) [2025年8月24日参照].
- 参議院 (n.d.) 「参議院公式ウェブサイト」 (<https://www.sangiin.go.jp/>) [2025年8月24日参照].
- 衆議院 (n.d.) 「衆議院公式ウェブサイト」 (<https://www.shugiin.go.jp/>) [2025年8月24日参照].
- 自由法曹団・改憲阻止対策本部 (2015) 『平和と民主主義と明日をかけて自由法曹団の戦争法制反対のたたかい』(https://www.jlaf.jp/old/menu/pdf/2015/151201_01.pdf) [2025年8月24日参照].
- ダイヤモンド社 (2025) 「60年安保闘争の“革命前夜”、国会内でデモ隊に包囲された「昭和の女帝」の運命は?」(ダイヤモンドオンライン) (<https://diamond.jp/articles/-/357508>) [2025年8月24日参照].
- 千代田区観光協会 (2019) 「千代田区観光協会公式ウェブサイト」 (<https://visit-chiyoda.tokyo/>) [2025年8月24日参照].
- 東京新聞 (2022) 「国会前で安倍前首相の国葬反対のデモが開かれる」 (<https://www.tokyo-np.co.jp/article/199332>) [2025年8月24日参照].
- 東洋経済新報社 (2009) 「急浮上した羽田ハブ空港化構想、出遅れた空の競争」(東洋経済オンライン) (<https://toyokeizai.net/articles/-/3154?display=b>) [2025年8月24日参照].
- 東洋経済新報社 (2015) 「来たる2020年、そしてその先のために 日本の玄関口「羽田空港」に、今何が求められているのか。」(東洋経済オンライン) (<https://toyokeizai.net/articles/-/85844>) [2025年8月24日参照].
- 土木学会 (n.d.) 「土木学会選奨土木遺産」 (<https://www.jsce.or.jp/contents/isan/2019.shtml>) [2025年8月24日参照].
- 日本空港ビルデング・東京国際空港ターミナル (n.d.) 「公式ウェブサイト」 (<https://tokyo-haneda.com/index.html>) [2025年8月24日参照].
- 日本経済新聞社 (2019) 「10月21日新国際ターミナル羽田空港で使用開始」 (<https://www.nikkei.com/article/DGKKZO51120330Y9A011C1EAC000/>) [2025年8月24日参照].
- 日本産業廃棄物処理振興センター (2020) 「近隣散策 国会議事堂」 (https://www.jwnet.or.jp/info/kikansi/assets/files/kikansi_202004_p39.pdf) [2025年8月24日参照].
- 日本土木工業会海洋開発委員会空港技術専門委員会 (2010) 「羽田空港の処理容量拡大策に関する調査研究報告書」 (https://www.nikkenren.com/teigen_houkoku/pdf/1010_02.pdf) [2025年8月24日参照].
- はとバス (n.d.) 「はとバス公式ウェブサイト」 (<https://www.hatobus.co.jp/>) [2025年8月24日参照].
- 舩谷鋭 (2023) 「戦争を巡るダーク・ツーリズム試論」『立教大学観光学部紀要』(25)、pp.2-16 (file:///C:/Users/user/Downloads/AA11362100_25_02%20(2).pdf) [2025年8月24日参照].
- 山形新聞 (2015) 『永田町ウオーキング>国会正門開くのは「特別な日」』 (https://www.yamagata-np.jp/feature/nagatacho/kj_2015022200606.php) [2025年8月24日参照].



写真1 羽田空港第3ターミナル外観



写真2 羽田空港第3ターミナル
展望デッキ



写真3 羽田空港第3ターミナル内部



写真4 羽田空港第3ターミナル内部



写真5 国会敷地内より
国会議事堂を臨む



写真6 国会敷地内より
国会議事堂を臨む



写真7 国会前交差点より
国会議事堂を臨む



写真8 国会正面前交差点より
国会議事堂を臨む



写真9 三権分立を象徴する「三権分立の時計塔」(北庭)



写真10 日本庭園の小川と滝(南庭)



写真11 銀杏並木



写真12 憲政記念館(代替施設)



写真13 憲政記念館の案内板



写真14 日本水準原点標庫



写真15 日本水準原点の解説パネル



写真16 日本水準原点標庫の遺構を記す銘板

